

西照寺々報 “さいしょう”

第8号

1988年3月12日

発行 浄土真宗本願寺派・西照寺

高岡市吉久2丁目4-40

西照

浄土真宗と県民性

二 口 光 興

今年も「降らんで結構ですら」の挨拶の正月でしたが、雪の無い正月という事で高岡市民病院の先生が、「北陸の冬は雪が無いとサマにならない」と云う話を新聞にのせておられました。其中に九州出身の某大学教授が、北陸出身の学生に対して「私達九州の人間は北陸の人にコンプレックスを持っているんです。#ねばり強くコツコツとやる#という事は全く苦手なんです。そして最も大きな理由は、北陸の人間なら誰れもが明日ドカンと降ってもこれに対応していく心の準備などが充分に出来ているからです」と。

私はこれを読んで、雪と県民性という連想から、昭和四十六・七年度に読んだ祖父江孝男著「県民性」(中公新書)という本を書棚から出して再度読みなおしましたが、北陸の場合は雪もさることながら、浄土真宗が大きな影響を与えている事を知り、この本の一部を借用させて頂きます。

東京や大阪等の大都市では、県人会というのがあります。在京県人会の活発度、機関紙の発行等の実態調査をした処、県人同士の結合力の強い所を上から順に新潟、富山、石川、長野、山口、長崎の諸県であるが、県人全体の結合が最も強い所が、新潟、富山、石川の北陸三県がこれに入るとの事です。

これを歴史的にさかのぼってみると、この北陸は浄土真宗が古くから栄えた場所であります。浄土真宗とは別名が一向宗、又は門徒宗とよばれる仏教の一派で、鎌倉時代に親鸞聖人によって創められ、戦国時代の十五世紀末本願寺八世法主の蓮如上人が、延暦寺の弾圧を逃れて北陸に達し、ここで布教にのりだしてからの地方はたちまち浄土真宗の一大中心地となるに至ったのであります。

極端な表現かも知りませんが、どんな悪人でもただ「南無阿弥陀

仏」と称えれば必ず救われる、という平易な教えのために、農民の間に広く普及していったのです。

こうして北陸の農民は浄土真宗を熱心に信仰することとなり、これを通じて、団結も著しく強くなりました。彼等は遂に一向一揆を起したのですが、この真宗は他方では、農民に著しい勤勉さという特色を与える事になりました。

それから又、赤児を貧困ゆえにすぐ殺してしまう、所謂間引の風は、古くからあちこちの農村にありましたが、北陸だけは浄土真宗の固い信仰のため、間引を極端なる罪悪と考える様になりました。この結果どんな赤貧のもとでも、子はさびかりものとして育てることとなったのです。間引で人口の減っている東北とか北関東等と異って、農村人口が益々過剰となり、江戸の末期から各地への出稼ぎが多く、「うんと働いてそして金を残せ」と。

特に当時の越中を支配していたのは前田氏であり、加賀藩の藩政下に置かれていましたが、連年の凶作に襲われたので、藩の財政や家臣の家計を安定させるために、一連の農業奨励等生活制限についての法令が出され、様々な政策がとられ、何時も不安と緊張のなかに身を置いて生きて来たのです。同じ北陸人でも隣の金沢の人々は、封建的地蔵に胡坐をかいていましたが、越中人は生きるために必死の奮闘をして来ました。とにかく良く働いて勤勉貯蓄的であり、又、合理主義的、強引で実行力がある事等が、特色として挙げられる様になりました。最近事情がだいぶ異なっているにしても、昭和三十年代の初めまでの富山県農民の理想は、とにかく金を貯めて一日でも早く立派な白壁の土蔵を建てる事にあつた様です。

この正月四日の北日本新聞に全国都道府県別の高齢者快速度指標というののつていましたが、最も快速度が高い「A」ランクには、島根、徳島、高知、富山の四県が入って居りました。ゲートボール会員の比率日本一、子供との同居率が第二位、一人当りの老人病

ひかり来たりにて

仏陀の出現

(8) 生死をこえる道

岡 西 法 英

三十五才にして仏陀となられた釈尊は八十才の死に至るまで、四十四年の間、ガンジス川中流の兩岸から北はヒマラヤ山脈のふもとに至る東北インドの広い地域に仏法を広められました。

それは「世の人々の安樂のため」の、野宿と遍歴の旅、死に至るまで終ることのない旅でありました。

今日に伝わる経典を見ると、子を失ってなげき悲しむ母、子にそむかれて悩み苦しむ父母、親を信じられなくて狂い苦しむ子、夫を失って生きる道の見えなくなつた妻、嫁をもてあます姑、一夫多妻に悩む妻、身分差別や恋に苦しむ若者、よるべもない貧しき老婆、この世の頂点にありながら、空しきと不安に生きる王や妃たち、道を求めながらも眞の師を見い出せなくて迷う修行者達など、あらゆる人間なるが故に悩める人々がその終りなき旅の目あてであつたことが知られます。

我々を捨て離れ、法をよりどころとして生きられた釈尊、法を自失つて悩める人々を自らの重荷として生きられた釈尊はやがて老いて八十才となりました。「アーナンダよ、修行僧らはわたくしに何を希望するのであるか？ わたしは内外の区別なしに法を説いた。完き人の教法には何ものかを弟子に隠すような教師の擡挙（たうきやう）教えない秘密）は存在しない。「わたくしは修行僧の仲間を導くであろう」とか、或いは「修行僧の仲間はわれに頼っている」とか思うことがない。向上につとめた人は修行僧の集い（むじやう）に関して何を語るであろうか。

アーナンダよ、わたしはもう古い朽ち、齡を重ね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齡に達してわが齡は八十となつた。アーナンダよ。譬えば古はけた車が革紐の助けによつてやつと動いて行くように、わたしの車輪も革紐の助けによつてもっているのだ。しかしアーナンダよ、向上につとめた人が一切の相をこころにとどめることなく一々の感受を滅したることによつて、相のない心の統一に入つてとどまる時、そのとき彼の身体は健全なのである。それ故に、アーナンダよ、この世で自らを鳥とし、自らをよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」パーリー語「大般涅槃經」

この言葉を語られた時、釈尊は既に重い病にかかつておられました。その地方に一種の恐ろしい伝染病（赤痢か）が流行したらしく、ナーディカ村という所で多くの在家信者が疫病で死んだと伝えられ、やがて釈尊も「恐ろしい病が生じ、死ぬ程の激痛が起つた」といわれます。

老いたる釈尊が病の苦痛に耐え忍びつつ、死期が近いことに気付いた上で語られたのがこの言葉であつたわけです。

ここには、老いと病いを克服する道が示されています。古い・病むというすがたや形へのとらわれを離れ老いと病にともなう苦痛にふりまわされることなく耐え忍ぶことこそ老いと病をのりこえて健全に生きる道であると教えて下さっています。そしてまた、自らの病と老いの苦をのりこえるためには、他人ではなく自分自身が向上するより他にないこと。その自己向上の道である法を説くこと以外に釈尊が弟子達にしてやれることは何もなくてにされたり頼られることもないこと。それ故に、自己向上の道である法を聞き、それをよりどころとして自分自身が老病を克服できる自分に変わらなければならぬこと。他人へ釈尊も親も妻も子も友達も医師も含めてをあてにしては駄目、道徳や法律やまじないや神だのみ、医学でも結局は解決できない自己自身問題であることが示されています。

「世の人々の安樂のため」に、釈尊が生涯をかけてなされたことは、頼られたり、拜まれたり、祈られたりすることではなく、老病死、別離、不和、貧困等を克服できる自分になるための、自己向上の道（法）を説いて聞かせることであつ

たことがはっきりわかります。

その意味では、私達が今日その法を聞かせて頂くことはそのまま、釈尊のお慈悲を賜っていることであり、二千数百年の歲月を越え印度から日本への幾万余の道程をも踏み過ぎて釈尊が生きて今日の私のそばまで歩みより、その如来のいのちの全てを私にそそいで下さっていることなのだといわなければなりません。

釈尊の死の近いことを知らされた弟子の阿難が嘆き悲しむのに対応して釈尊は説かれました。

「やめよ、アーナンダよ。悲しむなかれ、嘆くなかれ、アーナンダよ。わたしはかつてこのように説いたではないか。——すべての愛するもの、好むものからも別れ、離れ、異なるに至るといふことを。およそ、生じ、存在し、つくられ、破壊されるべきものであるのにそれが破壊しないように、といふことがどうしてありえようか。アーナンダよ。かかることわりは存在しない。アーナンダよ。長い間、お前は慈愛ある、ためをはかる、安楽な、純一なる、無量の、身と言業とところの行為によって、向上し来れる人（釈尊）に仕えてくれた。アーナンダよ、お前は善いことをしてくれ。努めはげむことを行え。速かに汚れないものとなるだろう」

釈尊にとって死の問題の解決とは何だったのか。それは生じた者は必ず滅するといふありのままの事実（法）を直視して、愛するこの世との別れの悲しみ嘆きをのりこえること以外ではなかったということがわかります。老や病をのりこえる道と死をのりこえる道は別ではありませんでした。ありのままの事実を直視して、そのことに苦しみ悩む自己にうち克つこと、法をよりどころとして努めはげんで、自己そのものを向上させ、老病死をものりこえる人間になることであつたのでした。

さて、やがて釈尊はお亡くなりになりますが、その大いなる死を「涅槃」(ニッバーナ)と呼んでいます。涅槃とは、いしみ貧欲、いしみ瞋恚、いしみ愚痴のなくなった状態、或いは「不死」を意味する言葉で、究極的な到達点として仏教徒のみならず、広くインドの宗教が理想と考えた境地です。よく知られた極楽浄土も久遠の阿弥陀如来の活動による涅槃の世界です。それは言葉の意味からもわかるように

元来「まこと」を表わし、釈尊とその指導を受けた弟子達は、生きている間に「涅槃を得た」とされています。

「たとい百歳の寿命を完うしたとしても不死の道を見なければ、不死の道を見た者の一日の生にも劣る」(法句経)

この言葉からうかがえるように、不死(生死を越えること)と同じ意味で究極の目標とされた涅槃は決して死や死後を意味するものではなかったわけですが、釈尊の死を涅槃と呼ぶにはそれなりの理由があるようです。

第一には、後代に「有余涅槃」「無余涅槃」と二つに分けて言われるようになったのですが、如何に涅槃(煩惱を断つて、不死を得ること)を得たとは言っても肉体を持って生きている限りは、克服しなければならぬ老病死とそれに伴う苦痛は当然あるわけです。老病死の苦悩を克服しつつ生き抜く力が得られたといふことを涅槃と言ったのですが、死によつてもはや個人的肉体は滅び、克服すべき肉体的苦痛もなくなった上は、完全なる涅槃、残らない涅槃といふことで釈尊の死を大涅槃と呼ぶのだといふことです。

第二には、釈尊はお亡くなりになることでもかえって、肉体を越え生死を越えて法の体得者、具現者として、死して後も人々の心に生き続け、伝承された教えとなつて語りかけ、人間の個人的な生死を越えた不滅の「法」とともにあることが明らかになつてきたということがあります。釈尊の死によつて、釈尊の法が、釈尊の生死を越えた真理であることがいよいよ明らかとなつた。肉体を持って老い病み死ぬ一個の人間としての釈尊は消えて、万人と共にある不滅の釈尊が人々に意識されるようになったことが釈尊の死を単なる死と見ずに、煩惱断滅と不死との完成である大涅槃と呼ぶようになった理由のようです。

まとめれば、釈尊本人にとつて、死は人生の完成であつたし、世の万人にとつては、釈尊の死は生死をこえたのちの実証であつたといふことが釈尊の涅槃といふことの意義だと思ふのです。

(高岡市内島・教願寺副住職)

院ベツト数も第四位と、元氣よく暮している高齢者の方々が
多い様で、全国的核家族化が進むなかで、お年寄が家族と強
いきずなの中で老後を送っていると云えそうです。(これも
浄土真宗の影響と思われる。大切に生きていきたいですね)
クリスチャンとか様々な新興の諸宗教に帰依している人々
を除いて、一般の日本人は、宗教に無節操の面がある様で、
例えば、一人の人間が、結婚式は神道で、クリスマスはキリ
スト教で、お葬式は仏教で行ない、それでいて何の矛盾も感
じていないと云う事ですが、こんな所は世界でも日本しか無
い様です。

ところが、こうした日本でも例外的な場所がいくつかあり
ます。奈良県の天理市は全市をあげて天理教であり、町全体
が宗教で動いており、又、熊本県の天草等は、土地に根を下
したカトリックが強ク、そして浄土真宗が生活のすみずみ迄
浸みわたっているのが、北陸の特色であります。

私はこの北陸の特色を貴重に思っています。そして、そ
れを形造って来た浄土真宗が、人間生きて行くため欠かせな
い、空気の様な存在であると信じております。

(吉久公民館長、富山県民生・児童委員)

第五期新湊組連統研修会 会員募集

親鸞聖人のみ教えに、自分の人生を学んでみませんか
対象 三十才〜五十才までの男女
期間 二年間で十二回(二ヶ月に一回程度)
時間 毎会午後七時から三時間程度
会場 新湊市内寺院(輪番制)
内容 おつとめ、讃歌の練習、各テーマについての話し合
い、法話等。
会費 一回 五〇〇円

〆切五月末日、詳細は当寺まで

吉久仏教子ども会 加入者募集

「教育においては、貧しきよりも豊かきほうが恐ろしい」と言われた方があります。確かに戦後、
先輩の皆さんががんばってくださったお陰で、日本は世界でも有数な「お金持ち日本」になり、物は
豊かになり生活は便利になりました。そういう中で、子供たちは、ずいぶん大きくなりました。でも、
何か、大事なものを育てられ損なっている感じがしてなりません。

「おかげさま」という言葉もその一つではないかと思えます。
近ごろは、「あたりまえ」という自分中心的、権利主義が先行きして、おかげさまがいろいろして
くれるのは「あたりまえ」。おじいちゃん、おばあちゃん、お小間使い」という「あたりまえ」子供
が増えてきたように思えます。あたりまえ子供が増えてくると社会が滅亡して行くことは、それこそ、
あたりまえであります。

自分の姿を謙虚に振り返って、私にとどいている恵みやはたらきに「おかげさまで……」と感謝し
ていくところに、心の豊かさや相手に対するおもいやりが、ひらけてくるわけです。

ところが、人間は理屈では分かってても、なかなか謙虚に「おかげさま」と、頭の下がらないように
出来ていません。ですから、小さい時から、それを知らせ、自分の姿に目覚めよというはたらき(宗教)
の前に座ることが、大切なことだと思えます。

「宗教のない教育は智慧のある悪魔を育てる」という諺もあります。
どうか、仏のみ教えを通して心豊かな人に育って行ってもらいたい。そういう願いのもとに、吉久
仏教子ども会は活動をして来ました。
新たに会員児童を募集致します。趣旨をご理解いただき、おすすめてくださいますようお願い申し上
げます。

毎月原則として第二日曜日

(次回、四月は十七日)

午前九時〜十時半

会場 西照寺

内容 おつとめ・法話・ゲーム等

その他各種行事あり

対象 小学生

年会費 五〇〇円

西照寺行事案内

春季永代経

三月二十二日速夜(午後二時)
から、二十四日(午前九時)
まで。

降誕会 五月十日

盆会 七月十四・十五日